

# 園芸・畑づくりと福祉文化

一番ヶ瀬 康子

長崎純心大学人文学部 852-8558長崎市三ツ山町235

## Gardening and Plant for Human Well-Being

Yasuko ICHIBANGASE

Faculty of Humanities, Nagasaki Junshin Catholic University, Mituyama-cyo Nagasaki 852-8142

### 1 社会福祉のこれからと福祉文化

長い間、日本の社会福祉は、貧乏で家族のいないさらに駄目な人への施策として位置づけられてきた。それだけに社会福祉施設に収容され、そこで貧しい生活をおくことを余儀なくされていたといえよう。しかし少子高齢化が進展し、家族もその機能が縮小さらに共稼ぎが通常になると社会福祉におけるとくに福祉サービスが、“誰でも、いつでも、どこでも”必要とされるようになってきた。

とくに20世紀末から21世紀にかけて、社会福祉をめぐる状況はおおきく変わった。まず、それまでのように施設に収容隔離するのではなく、むしろ在宅のまま福祉サービスが受けられるような仕組みをつくってきたのである。たとえば介護保険における在宅福祉の強調はそれといえよう。

二つ目は、従来の施設の内容の在り方では、高齢者をはじめ障害者など他の利用者也、次第に納得がいなくなってきた。それだけに施設をなるだけこれまでの居住していたところの近くに作り、同時にその在り方を質の高いものにしていくという方向に向けられてきたのである。そのなかでさまざまなアクティビティケアなどもなされてきた。

三つ目は、さらに在宅と施設の福祉サービスをつないで、地域におけるネットワーク化を試み、たとえばそのつなぎ目であるデイサービスなどで、人々がお互いに助け合って生きる仲間づくりを推進してこようとしている。

四つ目には、地域で開かれた福祉サービスをいうことで、医療保健あるいは教育文化との連携も不可欠になってきたということである。とくにボランティアの参加も重要な要件として改めて注目され、NPOにおける福祉サービスへの期待も高まってきたのである。

しかし、日本の社会福祉の長年にわたっての位置づけ、ことに住民の意識にひそむ根深い後遺症は、依然として続いている。それを打ち破って、在宅でも施設でもさらに地域においても質の高い社会福祉に変えていかねばな

2002年1月12日受付。

らないという今日の状況に対して、私たちは、福祉文化という概念を積極的に使い始めた。そして、1998年に、福祉文化学会を結成した。

その学会というのは、社会福祉の研究において、単に観念的に理論を操作するのではなく、先駆的で優れた実践を行っている現場に出向き、その現場の実践を学びながら、相互に情報を交換して、自らの実践を高めていくという在り方の学会である。

### 2 福祉文化としての園芸・畑づくり

以上のような学会の努力の過程で、園芸というものがきわめて大きな意味をもっている場面にしばしば直面をした。たとえば質の高い施設と思われるところでは花がいっぱいで、また庭や玄関などに園芸高校等のボランティアがあふれ、緑が豊かでしかも花も季節に応じて植えられていることをみることができた。世田谷区の芦花ホームなどがそうであり、いつ行っても見事な花が楽しめ、またそれが高齢者の人々の心を生き生きさせており、さらに花の香りが満ちて、特別養護老人ホーム特有の特臭がそれによって消されていた。それだけではない。珍しい花などについて、話題が弾み、利用者と外来者との間の交流のきっかけづくりにつながるということも見受けられた。高齢者にとっては、花は単なる植物ではない。それは思い出の象徴であり、同時に目を楽しませてくれる神の芸術品でもある。さらに香りを豊かに振り撒いてくれるアロマケアの一環である。また皆が花によって心が和むことができるというそういう場づくりに欠かせぬものである。とくにイベントなどで飾られる花は、利用者の心のリズムづけとなり、活力を豊かにすることにもつながる。このような効果というのは、決して施設だけではない。在宅においても高齢者の生活のなかで、花は欠かせない。まず一人暮らしの高齢者の仏壇には、花が活けられている場合が多い。そのことに気づいて水を代えたり、また花を買ってきたりする介助ができないホームヘルパーは、決して信頼されるヘルパーにはなりえない。さらに農村の高齢者の生きがいは、畑づくり、花づ

くりである場合が少なくない。都市部でそのような機会が持てない高齢者よりも、生き生きとして長生きの高齢者が多い。自治体によっては、“じいちゃん畑”，“ばあちゃん畑”を確保し、そしてそれによって作られた野菜や花を、朝市で売ることを楽しみにしている例も随所でみられる。愛知県渥美半島の赤羽根町は、白菊作りで有名な町である。高齢者も自らの畑に花を栽培し、朝市で売り、小遣いかせぎをする一方で、花を戦友あるいは同級生で戦死した人たちのお墓にそなえている人もいる。

地域における花づくり、野菜づくりの効果もさまざまである。富山県大沢野町の老人大学では、町民畑として開放されている畑で、小学生と高齢者の人がともに園芸・畑づくりを楽しむ機会を設けている。それを通じて花の名、野菜の名さらに虫の名などを高齢者が教え、また小学生も汗を流すことを通じて、園芸や畑づくりの楽しさを体得している。

いずれにしても従来の社会福祉を活気づける上で、そしてすべての人に生きがいさらに交流を創り出すために、園芸や畑づくりの意味は、きわめて大きいといえよう。

### 3 学会への期待

社会福祉施設とりわけ知的障害の人たちの施設では、かつては農作業、園芸が、彼らのもっとも大事な労働であり、またもっとも好まれる労働であった。生きがいである人も少なくなかった。ところが今は、施設職員が土に触れたことがなく、しかもそれに対して無知な管理者の場合、広い施設のなかの畑が荒れ果てている。また、そこに暮らしている知的障害者の行動が粗暴化している。このような状態を変えていくためには、やはり園芸や畑づくりができるような人、専門家、あるいは福祉職員自体への研修、さらに園芸ボランティアが活躍できるようにすることがきわめて大きいと思う。

人間・植物関係学会では、是非社会福祉との関係を大切にしていきたい。アメリカの研究でも、草花が豊かなナーシングホームとそうでないところでは、罹病率や生存年齢が違うということである。つまり、身近なと

ころで生き生きと生命がみなぎっている草花を見るのとそうでないのと、あるいはより自然科学的意味もあるかもしれないが、生命力が違うということになるのである。さらにスウェーデンの研究においても、鉄筋コンクリートのなかに囲まれている病院とそうではなく自然のなかでの緑豊かな病院とでは、手術後の回復が異なるということや、とくにそれが精神障害の場合により回復の速さが違うと聞いたことがある。いうまでもなく、緑豊かな病院の方がはるかに回復力を早めるわけである。自閉症の研究でも、緑豊かなところでのキャンプなどの活用が、大きな意味を持つと聞いている。痴呆老人の人にとっても、キャンプあるいは自然豊かななかでの自然との接触が、よい影響をもたらすと聞いたことがある。

それらのことを考えた時に、人間が生きるということと、植物の生命力との相互関係あるいはその影響等をしっかりと認識し、科学的に説明できるような学会として発展すれば社会福祉にとっても大きな意味を持つであろう。つまり社会福祉自体人間の生命、生活そのものを社会的に保障することであるだけに、その保障の中身、内容づくりとして大変大きな意味と認識ができると思う。さらにある意味では、地球規模での現在の自然破壊をもくい止めるひとつの鍵をもつことになるのではないだろうか。

私たちは、福祉を一人一人への生命と暮らしへの保障としての福祉サービスとしてとらえるのみならず、それが、グローバルに地球を救うものにつながっていく在り方として、今回の学会の意味を考えている。その意味において、さまざまな角度から研究が深められその交流が豊かになされることを期待する。そしてそれが、ある場合には、社会福祉さらに福祉文化の関係者あるいはボランティアにも伝わること、また一方で、住民その他の専門領域の人にも理解され、皆が結合されていくような動きになることを期待したい。今回の人間・植物関係学会への期待は大きい。